

(PDF 版・3の1)『教会教義学 神の言葉Ⅱ／3 聖書』「十九節 教会のための神の言葉——二 神の言葉としての聖書」

(文責・豊田忠義)

「十九節 教会のための神の言葉——二 神の言葉としての聖書」(76-114頁)

(5)「われわれは、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である〕預言者と使徒たちを、神の啓示〔起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」そのもの〕についての証人として理解することによって、「彼らに対して」、すなわち「三位相互内在性」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われぬ差異性」における第二の存在の仕方——すなわち「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「きょうも、きのうも、いつまでも変わることがない」イエス・キリスト自身）によって〈直接的に〉〈唯一回の特別に〉召され任命された彼らに対して、「その証人としての……機能において」、「全く特定の選び出し〔「任命」〕、われわれおよびほかのすべての者に相対しての〈一回的な〉〈独一無比な〉立場と意味を帰した」。「聖書の形式」は、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉として、換言すれば預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」として、その「預言者および使徒たちの任命と機能にある」。また、「聖書の内容」は、「隅のかしら石、かなめ石（エペソ二・二〇）にある」、すなわち起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」そのものである「イエス・キリスト自身にある」（Iコリント1・12以下および3章）。

そのような訳で、その預言者および使徒たちの「選び出しの概念」、「任命の概念」は、キリストあつての「啓示に到達するためには、預言者と使徒たち、……の〔「实在の成就された時間」、「キリスト復活の四〇日（使徒行伝一・三）」、「キリスト復活四〇日の福音」、「<まこと>の過去」と「<まこと>の未来」を包括した「<まこと>の現在」を〕〈待望（すること）〉と〈想起（すること）〉を媒介・反復することが、聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とすることが、肝要であるということを指し示している。したがって、「聖書における預言者および使徒たちの選び出し、拔擢、任命」は、「決定的に、第一に」、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での客観的な「存在的なラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している**第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身**（「啓示ないし和解の实在」そのもの）を**起源とする「神の言葉の三形態**」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係

と構造（秩序性）における**第二の形態の神の言葉である聖書**（その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」）を、自らの思惟と語りと行動における**原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である「教会自身に対する、教会自身のための、選び出し、抜擢、任命である」**。このような訳で、「**聖書が教会を支配するのであって、教会が聖書を支配してはならないのである**」——『……、預言者と使徒たちは、われわれと違って、奇蹟と教導の賜物を受けた。われわれにとってはただ、われわれに対する恵みのこの解き明しによってわれわれに伝えられていることを語ることだけが、ふさわしいのである』（ヨハネス・ダマスケヌス）。第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である「**教会を通して……帰せられる、聖書における選び出され抜擢され任命された預言者や使徒たちという概念**」は、預言者および使徒たちのその＜最初の＞＜直接的な＞＜第一の＞「**イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教**」において、「**神ノ代理ヲツトメル者として託サレタ職務ヲ忠実ニ果タシ（カルヴァン）**」「**貫徹した**」ということに基づいたそれである。したがって、靖国神社参拝推進論者で国家主義者の富岡幸一郎の『使徒的人間——カール・バルト』という本のバルトの自然神学論がただ高校の倫理資料集レベルで書かれていた〔それ故に誤解と誤謬と曲解をもって書かれていた〕だけでなく、この本のタイトル自体も、バルトの使徒的概念からして全く概念的に成立不可能なものなのである。これが大学で教える者（キリスト教的著述家）の知識の水準であるが、しかし、いったん商業資本としてのマス・メディアに登場すれば、その保護下において、その本にたとえ根本的な原理的な誤解や誤謬や曲解があろうと、その誤解や曲解や「**誤謬に普遍性や組織性の後光をかぶせて語られ**」流通してしまうのである（吉本隆明『カール・マルクス』）。このような訳であるから、われわれは、特に人文科学系の領域においては、大学社会やそうしたマス・メディア界で知識人と呼ばれている知識人の知識や情報を「そのまま鵜呑みにしたり模倣したりすることをしないほうが良い」のである（吉本『自立の思想的拠点』「日本のナショナリズム」）。

その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「**聖書**」は、「**神の啓示についての証言としての書物である**」、換言すれば「**三位相互内在性**」における「**失われない単一性**」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「**外に向かつて**」の外在的な「**失われない差異性**」における第二の存在の仕方、すなわち起源的な第一の形態の神の言葉としての「**啓示ないし和解の实在**」そのものである「**イエス・キリスト自身についての証言としての書物である**」。この「**書物**」は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「**啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力**」の＜**総体的構造**＞の中での神のその都度の自由な恵みの決断による客観的なイエス・キリストにおける「**啓示の出来事**」と、その啓示

の出来事の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて、「**神の言葉が服従を要求し、服従を見出す時に、**〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である〕**彼らの証言の中で神の啓示**〔起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」〕**が示されるという、その限界において、聖書である**。「聖書」は、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、すなわち起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」そのものである「**イエス・キリスト自身に服従するという仕方でなされた、神の啓示についての証言としての書物である**（Iコリント3・11）」。

さて、「ホルスト・ステファンのキリスト教信仰論の源泉の総内容としての『神の言葉』と呼んだものの内部での『段階的順序』」は、第一に、「イスラエルの……時代から、パウロ〔の時代〕を通して、〔ルターを最後〕とする〕プロテスタントの基礎づけ〔の時代〕まで続いている預言者という第一の序列」（第一の段階）、第二に、「たとえば、古代末期のオリゲネスやアウグスティヌス、中世における聖トマスやマイステル・エックハルト、古プロテスタント主義の時代におけるメランヒトン、ツヴィングリ、カルヴァン、……ドイツ新プロテスタント主義の時代における……シュライエルマッヘル……のような特定の時代にとって標準的となった多くの敬虔な人々という第二の序列」（第二の段階）、第三に、「例えば中世においては聖（！）フランチェスコ、近代においては……キールケゴール等、ある時代の子であるが、信仰のある側面において、その時代を超えている者たちという第三の序列」（第三の段階）としてあり、その「原則は、バッハの芸術（音楽）等も含めて宗教的な詩人や偉大な神学者における生ける信仰は、……単に聖書の中だけでなく、〔人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者レベルでの神への信仰」として、〕ほかのところでも出会い、『神の言葉』となることができる」という点にある。しかし、そこにおいては、「**聖書の〔特別な〕選び出し、任命という事柄は排除されてしまう**」から、その「**聖書の〔特別な〕選び出しについては何も語る事ができないことになってしまう**」。さらに、そこにおいては、その「原則の下で判断され規定された『預言者』ルターあるいは『聖』トマスおよび『聖』フランチェスコのところで聞くことのできる神的命令」（第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とする第三の形態の神の言葉である教会のところで聞くことのできる神的命令）と、「使徒パウロのところで聞くことのできる神的命令」（第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書のところで聞くことのできる神的命令）と、その第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「使徒パウロの特別な位置づけにおけるイエスのところで聞くことのできる神的命令

との間にある厳格な区別性」は、換言すれば**第一の形態の神の言葉**であるイエス・キリスト自身を起源とする**第二の形態の神の言葉**である「使徒パウロの特別な位置づけ」を含めたところの、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している**第一の形態の神の言葉**であるイエス・キリスト自身を起源とする「**神の言葉の三形態**」の関係と構造（秩序性）は、「破壊されあるいは弱められて、そこにはただ程度の差だけがあるということになってしまう」、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという〈方式〉を揚棄し排除してしまうことになる。したがって、「そこにおいては、〔人間中心主義における、「人間の〔自由な〕自己運動を神のそれと取り違えるという混淆」・混同・混合、「神の自由を認識していないという事態」、神の人間化あるいは人間の神化としての〕**神喪失**と〔自由な人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化されたに過ぎない「存在者レベルの神への信仰」としての〕**偶像崇拜**を生じさせるのである」。

そのような訳で、「**神の啓示**〔起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」〕についての証言〔第二の形態の神の言葉としてのその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」〕として、われわれが**あの書物に聖書としての性格を帰するということ**は、第三の形態の神の言葉である「教会に対する批判的な基準〔原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕としての**聖書**に」、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて、終末論的限界の下で絶えず繰り返す、「**預言者的——使徒的機能が出来事となって起こることを、……想起して**」、「それに聞き従う・服従するということである」。この終末論的限界の下で絶えず繰り返す聖書を媒介・反復した「想起」と「服従」について、バルトは、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である「**キリスト教会が、……ただ**〔第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である〕**聖書の中でだけ**〔聖書を媒介・反復する中でだけ〕、〔起源的な第一の形態の〕**神の言葉を聞くことを期待するところの〈想起〉とそれに対応する〈服従〉……の中で、……神の至高さと結びつく**」というように述べている。イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が、啓示に固有な自己証明能力」を持っているのであるから、起源的な第一の形態の神言葉自身が、「神の言葉の出来事の自己運動」を持っているのであるから、**起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」**は、「自分で自分を選び出す自己選出の力の中でのみ、〔第二の形態の神の言葉としてのその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」である〕**聖書は選び出されることができる**」。

「**事実ただひとつ絶対的な、原則的な、破壊されることのない優位性が存在する**——「それは、創造主としての神が、その被造物全体および例外なしにすべての個々の被造物に対して持ち給う優位性である」。この「**優位性**」は、イエス・キリストにお

ける「啓示自身が、その啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っているのであるから、起源的な第一の形態の神言葉自身が、その「神の言葉の出来事の自己運動」を持っているのであるから、「ただ〔第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である〕聖書を通して、しかも〔啓示ないし和解の实在〕そのものであるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」である〕啓示証言として、したがってそれ自身神の言葉として読まれ、理解され、説明された聖書を通してしか、教えられない優位性である」。この「認識」は、「優位性と劣位性」、「創造主と被造物」、「絶対的と相対的との区別を思惟し、直観と概念において認識しているだけでなく、自分自身のものとして、そこを生きているところの認識、信仰である」、この「区別性の認識」は、「単なる理論〔単なる知識〕……であり続けるのではなく、われわれ自身がその区別をわれわれの生をもって、われわれの実存の中で、遂行するそれ〔認識、信仰〕である」。何故ならば、その「絶対的なものの優位性の認識」(信仰)は、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での「啓示と信仰の出来事」に基づいた「絶対的なものの権威に対する受認であり服従である」からである。その「絶対的なものの優位性の認識」(信仰)は、その現にあるがままの現実的な人間存在における「われわれの思惟を、滅失させてしまう裁きを生起させ、裁きを実在化させるのである」。その現にあるがままの現実的な人間存在におけるわれわれ人間の時間は、「聖書においては「『失われた』時間」、「否定された時間」、「否定的判決の時間であり、实在の時間であるイエス・キリストにおける啓示の時間から「『攻撃』された時間である」。それに対して、「われわれだけでわれわれの時間を持っていた時に生起したわれわれのための神の時間」、「イエス・キリストの現臨の出来事」、「イエス・キリストにおける啓示の時間」、「イエス・キリストの時間」、「時間の主の時間」は、「問題に満ちた非本来的な失われたわれわれの時間の中で、实在の成就された時間〔「キリスト復活の四〇日（使徒行伝一・三）」、「キリスト復活四〇日の福音」、「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」である」。ここに、「まことの現在、まことの過去とまことの未来が存在するし、神の言葉がある」。

「聖書に従えば、……絶対的なものと相対的なものの併存」は、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという〈方式〉の下で、「われわれに対してイエス・キリストの中で啓示された万物の創造主の愛と忍耐について語ることによって、……この創造主の被造物について語ることによって、可能とされている」。「聖書の中で出来事として起こっていること」は、福音（徹頭徹尾神の側の真実としてのみある「恵み深い神とその恵みによる人間の救い」）を内容とする福音の形式としての「神的な律法の宣言として、〔キリストにあつての神の、その現にあるがままの現実的な人間存在としての〕われわれの現実存在への介入であ

る。「聖書の中でなされている神の優位性の認識」は、徹頭徹尾神の側の真実としてのみある「恵み深い神とその恵みによって救われた人間の共存という……思想を、〔イエス・キリストの中で啓示された〕創造主と被造物という思想の中で、……遂行することをゆるし、かつ命じる神的善き業〔神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕についての認識である」。ここにおいては、「何も絶対化されることはないし、何人も神化されることはない」。徹頭徹尾神の側の真実としてのみある「インマヌエルの出来事」は、「われわれ人間からは何ら応答を期待せず・また実際に応答を見出さずとも、〔神としての〕神であることを廃めずに、何ら価値や力や資格もない罪によって暗くなり・破れた姿の人間的存在を己の神的存在につけ加え、身内に取り入れ、それをご自分と＜分離出来ぬように＞、しかも＜混淆〔混同・混合・共働・協働・共勞、「神人協力説」〕されぬように＞、＜統一し給うた＞ということの内容としている」——「人間の人間的存在がわれわれの人間的存在である限りは、われわれは一切の人間的存在の終極として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ない」、「しかしそれと同時に、人間的存在がイエス・キリストの人間的存在である限りは、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外の何ものも眼前にみないということ——これが神の恩寵である」、「『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、＜私は決して神の子に対する私の信仰に由って生きるのではなく、神の子が信じ給うことに由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある主格的属格として理解された「イエス・キリストが信ずる信仰」によって〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、われわれのために人として生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである」（『福音と律法』）。

「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、すなわちまことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおいて、「絶対的なものと相対的なものの区別がなされたことによって」、＜神聖＞性・＜神的なもの＞性〔すなわち「啓示ないし和解」〕と＜書物＞性・＜人間＞性〔すなわち人間の言語を介した「概念の实在」との全体性としての「聖書は、あとから初めて、自分勝手に絶対的なものの側に立つようになったのではなく、既に……初めから……聖書は、そこに立っていたのであり、あの絶対的なもの〔それ自身に固有な自己

証明能力を持っている「啓示ないし和解の实在」そのもの〕の側から……既に語っていたのであり、まさにそのところからしてあの区別が……実際的になされたことによって……まことに、真剣に、なされうるものとなったのである。「聖書は、一回的に、独一無比の仕方で、絶対的なものの側に立っており」、「それによれば聖書は確かに神の言葉であるという聖書原理」は、「この全く起源的な事情の、ただあとからの確認であろうとしているだけである」。したがって、「聖書の人間的な言葉と神の言葉の間には、それゆえに被造物的实在それ自体と創造主なる神の实在の間には、＜直接的な同一性＞は成立していないのである」。したがってまた、「一方が他方に変化することや、一方を他方と混同〔・混合・協働・共働〕するということは決してできないことである。「神と人間との同一性は、神の本質にも、人間の本質にも基づいていないのである」。すなわち、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞の下で、「神によって特別に欲せられ、造られ、働き出された、その限り間接的な、〔徹頭徹尾神の側の真実としてある〕神が人間に対してとられた決断と行為〔神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕に基づいている同一性、＜間接的同一性＞のことである」——「カルヴァン」は、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（働き・業・行為、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間）、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である「キリストの肉〔その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」〕の中での神の現臨について語ったことを、人は、必要ヲ変更ヲ加エテ、そのまま預言者と使徒の言葉の中での神の現臨〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉の中での神の現臨〕に適用することができる」と述べた。

そのような訳で、キリストにあつての「神は神であることをやめ給わないように、人間的なものは人間的であることを止めはしない」。したがって、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における神の言葉の受肉——すなわち「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」、「神の人間性と預言者および使徒たちの人間性の間的人格の統一はあり得ないことである」、「神の栄光へと高められた人間性であるイエス・キリストにおける人間性」と「われわれ人間の人間性」は、常に、無限の質的差異の下にある。神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞は、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」、ちょうど「聖霊は、人間精神と同一ではない」し、

「人間が聖霊を受けることを許され、持つことが許される場合、(中略) そのことによって、決して聖霊が人間精神の一形態であるなどという誤解が、生じてはならない」し(『教義学要綱』)、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での「認識的なラチオ性」としての聖霊によって更新された人間の理性も聖霊ではないように(『知解を求める信仰 アンセルムスの神の存在の証明』、『バルトとの対話』)。バルトは、1956年(70歳)に「エディンバラに献呈された」『教会教義学』Ⅲ/3と同じ年になされた講演の『神の人間性』において、「神の神性において、また神の神性と共に、ただちにまた神の人間性もわれわれに出会う」と述べ、キリストにあつての「神が神であるということがいまだに決定的となっていないような人は、今神の人間性について真実な言葉としてさらに何か言われようとも、決してそれを理解しないであろう」と述べている(人類史において世界普遍性を獲得した西欧近代以降の人間中心主義において、人間の自由な内面の無限性、人間の自由な自己意識・思惟・理性の類的機能に基づく人間の神化あるいは神の人間化の原理、「神の内なる人間、人間の内なる神という神人一体」の原理、神と人間との混淆の原理を発見したヘーゲルに抗することができる神学における思想的武器は、それ故に自然神学(自然的な信仰・神学・教会の宣教)の段階で停滞と循環を繰り返すその「ヘーゲルの強力な痕跡」を持っていた「シュライエルマッハー」や「シュライエルマッハー以外の人々」に抗することができる神学における思想的武器は、それ故にまた自由な人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された様々な「存在者レベルでの神」に抗することができる神学における思想的な武器は、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという〈方式〉だけである——『ローマ書』「第二版序言」、『ルートヴィッヒ・フォイエルバッハ』等。また、42歳から72歳までのバルトの自己史(个体史)である『バルト自伝』で、「イエス・キリストにおける私の恩寵の神学として組織だてるといふ私の仕事に生じた変化の意義を見かつ理解するためには、一九三二年と三八年に現われた私の『教会教義学』の最初の二冊〔邦訳の『教会教義学 神の言葉』Ⅰ/1、Ⅰ/2、Ⅱ/1、Ⅱ/2、Ⅱ/3、Ⅱ/4〕を、ある程度研究する必要がある」と述べている。その「最初の二冊」において、バルトは、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書またその聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である教会の宣教において「神は、イエス・キリストの父、子としてのイエス・キリスト自身、父と子の霊である聖霊であり、このような三位一体の神として自己啓示する」、それ故に「この啓示が教会の宣教における〈客観的な〉信仰告白および教義(Credo)である三位一体論の根拠である」、それ故にまた「この三位一体論は、神論の決定的に重要な構成要素であり、啓示の認識原理である」、それ故にまた「教会の宣教の批判と訂正は、常に、この三位一体論に即して行わなければならない」と述べている。自己自身であ

る神としての自己還帰する対自的であって対他的な（完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を本質とする「父なる名の内三位一体的特殊」・「三位相互内在性」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の根源〔起源〕としての「父は、子として、自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源である」、それ故に「その区別された子は、父が根源〔起源〕であり、神的愛に基づく父と子の交わりである聖霊は父と子が根源〔起源〕である」、それからまたこの神は、われわれのための神としてその「外に向かつて」外在的な「失われない差異性」の中での三つの存在の仕方における第二の存在の仕方である「子〔子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕の中で創造主として、われわれの父として自己啓示する」、それ故に「父だけが創造主なのではなく、子と霊も創造主である。同様に、父も創造主であるばかりでなく、子に関わる和解主であり、聖霊に関わる救済主でもある」、この「三位一体の根本命題に即して理解すれば、聖霊なる神は、三度目に、父と子の二つの存在の仕方から生じる一つの存在の仕方である」、それ故にこの「聖霊の存在の仕方は、父と子の啓示に対する特別な第二の啓示ではない」、「聖霊は、父なる神と子なる神の愛の霊である」、「ここに、聖霊の根源〔起源〕がある」、この「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第三の存在の仕方である「**聖霊**〔啓示されてあること・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者〕の中で、父〔啓示者・言葉の語り手・創造者〕と子〔啓示・語り手の言葉・和解者〕は、**神的愛に基づく完全な共存的な交わり〔関係〕においてある**」。このような訳であるから、『神学者カール・バルト』の訳者である蘇光正が、その「訳者あとがき」で、皮相的な時系列的判断にだけ依拠して、「バルトが『聖霊』を口にする場合、それは『教会教義学』の第四卷（殊に第三部）〔1956年の70歳の時に講義をはじめている〕以来ますます載然と、排他的にイエス・キリスト自身の霊的臨在またはその力をさし、したがって自然神学へのブルンナー的遡行（またはヘーゲルの哲学化）を許す『父の霊』は考えられていない」と述べた時、それは全くの誤解・誤謬・曲解なのである。『教会教義学』の第四卷（殊に第三部）以来においてバルトが『聖霊』を口にする場合においても、その「父〔啓示者・言葉の語り手・創造者〕と子〔啓示・語り手の言葉・和解者〕」の「**神的愛に基づく完全な共存的な交わり**」である「**聖霊**」は、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞の中での客観的な「存在的な必然性」に包括された主観的な「認識的な必然性」、すなわち客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」のことであり、その神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下

で与えられる人間的主観に実現された神の恵みの出来事（信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰）のことである。このような訳で、蘇は、『教会教義学』の第四卷（殊に第三部）以来、バルトが『教会教義学 神の言葉』論から変節したような言い方をしているのであるが、バルト自身は、全く変節してはいないのである。

「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「**預言者と使徒たちの人間性**は、神の栄光へと高められた人間性ではない」し、「あくまでも人間の人間性でしかなから」、「独立した仕方
で自分だけで啓示することはできない」。したがって、彼らは、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方における「イエス・キリストの人間性の中で起こった、起こっている啓示を証しすることができるだけである」。「**預言者および使徒たち**」は、「この区別において、啓示そのものの中で〔起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示ないし和解の实在」そのものの中で〕、啓示そのものと共に、立てられる「啓示の<しるし>として」、「直接的に、啓示そのものの中で、**啓示そのものと共に召された証人の証言**として〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」として〕」、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「**聖書**も、神の決断と行為を通して導入された、人間的存在と神ご自身との**間接的な同一性**の中に立っている」。したがって、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「**聖書は、<人間の言葉のしるし>**〔イエス・キリストによって直接的に唯一回特別に召され任命された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教〕**の中での<神の言葉>**〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「隅のかしら石」・「かなめ石」・「キリスト・イエスご自身（エペソ二・二〇）〕**である**」。

「ところで**第三のもの**」とは、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「啓示ないし和解の实在」そのもの）を起源とする「**神の言葉の三形態**」（換言すれば、キリスト教に固有な類と歴史性）の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である**聖書**（その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」、すなわち預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）を、自らの**思惟と語り**と**行動**における**原理・規準・標準**とした**第三の形態の神の言葉である教会の宣教**（説教と聖礼典）の**<客観的な>信仰告白および教義（Credo）**のことである、「啓示との間接的同一性にある聖書を媒介・反復する「関係の中で……存在する」教会の<客観的な>

信仰告白および教義 (Credo) のことである。「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の「言葉が聖書〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉〕となるということ」は、「あくまでも<間接的同一性>としてのみそうなのであって」、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「聖書」は、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の「言葉が肉〔その内在本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉〕となるということと同一ではない。しかし、まさにその一回性の中で……普遍的な意義を持つ受肉は、〔すべての人々が純粋な教えとしてのキリストにあっての神、キリストの福音を現実的所有することができるために、〕聖書〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉〕となるということ、無条件的にあとに伴わなければならなかったのである。「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉は、それが肉となった〔真に罪なき、従順なお方〕「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」〕ことによって、「預言者および使徒の言葉となったのであり〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉となったのであり〕、「主トシテノ彼にもともと固有である栄誉が、僕トシテノ彼らに与えられたのである」。このような訳で、聖書によって宣教を義務づけられている教会は、「神の言葉を通して造られ、神の言葉によって生きるのである」、換言すれば「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉を通して造られ、その神の言葉によって生きるのである。したがって、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とした教会が、「本当に教会であろうと欲する時には、ちょうど〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストご自身を見過ごしたり、通り過ごすことができないのと同じように」、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である「聖書を見過ごしたり、通り過ごすことはできないのである」。「カルヴァンはこの認識を、ナゼナラ、(ワレワレノ救イニカカワル) 神ノ奥義……ハ (スデニ言ワレタトオリ) ソレ自体トシテ、マタソレ自身ノ性質ニオイテハ、見ワケルコトガデキナイカラデア。タダワレワレハ、コレヲ神ノ御言葉ニヨッテノミ直視スルノデア。コノ御言葉ノ真実サハ、カレノ語リタモウタコロハ皆スデニ成就シタ、ト見ナケレバナラナイホド、ワレワレノユルガヌ確信デナケレバナラナイ」というように定式化した。「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉が、啓示の<しるし>としての聖書の中に現臨し、力を発揮するということ」は、「神的な事柄」(神の

側の真実としてある「啓示ないし和解」が、人間的な「言葉〔その最初の直接的な第一の「概念の實在」〕の中に現臨し、力を発揮することを意味している。「人間の言葉の〈しるし〉」、「啓示の〈しるし〉」の概念については、(PDF版・その1)「〈イエス・キリストにおける神の自己啓示〉および〈その自己証明能力の総体的構造〉ならびに〈まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会〉」の中の〈その自己証明能力の総体的構造〉および(PDF版・その4)「〈神の言葉の三形態〉」を参照されたし。

「間接的な同一性」としてあるところの、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、すなわち「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」(「啓示の〈しるし〉」、「人間の言葉の〈しるし〉」)としての第二の形態の神の言葉である預言者のおよび使徒的人間たちの人間の言葉は、「イエス・キリストご自身と同様に」、「それ自身、まことの神にしてまことの人間に、啓示に属しているところの啓示についての証言〔〈神聖〉性・〈神的なもの〉性〕であり、同時にまた特定の人間性をもつ〔〈書物〉性・〈人間〉性〕をもつ」歴史的な文書(≪信仰書、文学書、思想書≫)である。この「聖書」が、聖霊の業である「啓示されてあること」、客観的な「存在的なラチオ性」——すなわち、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)における第二の形態の神の言葉として、「その現実存在の中で、……神の威厳と独一無比性を証ししている」。

そのような訳で、「教会の宣教(説教と聖礼典)」は、「それらが自ら〔「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)における第三の形態の〕神の言葉であることができるためには」、第二の形態の神の言葉である「聖書の中での起源的な〔第一の形態の〕神の言葉の範例、権威、妥当性を必要としている」、それ故に教会の宣教は、具体的には第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造(秩序性)における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下で絶えず繰り返し、それに対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を尋ね求め続けて行かなければならないのである。「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉は、「聖書の中で証しされている神の起源的な〔第一の形態の〕言葉が現実性を持つためには」、すなわちすべての人々が純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を現実的に所有することができるためには、その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神

の言葉である「聖書において読まれ、理解され、注釈され、宣教されることが必要であるから、〔第三の形態の神の言葉に属する〕教会にそのことを欲しているのである」。したがって、「もしも教会が、内的にその本質から教会ではない時、それは、…教会があまりにも少ししか聖書の言葉のもとで生きていないからであり、生きなかつたからである」。言い換えれば、教会が、終末論的限界の下で絶えず繰り返し、「正しい仕方

で聖書を読み、理解し、注釈し、宣教しようとするならば」、すなわち「教会が聖書を支配する」のではなくて「聖書が教会を支配する」ならば、教会が「聖書の言葉の下で生きようとするならば」、「その時にはほんとうに教会は、すべての民にとって、教会の壁の内部にいる人々にとってばかりでなく、また教会の壁の外部にいる人々にとっても、慰めと希望を与える場所となり、またこの世にあって、まことの尊敬をかちとることができるし、尊敬をかちとったのである」。その時には、「イエス・キリストにおける『神われらと共に』という言葉、キリスト教使信の中心」は、教会共同性・教団共同性のような「狭い共同体からその事実をまだ知らぬすべての他の人々、広い共同体に向かつての運動において」、その現にあるがままの現実的なわれわれの人間存在における不信（内在的・外在的なそれ）、非キリスト者、非キリスト教、非知、個体的自己としての全人間・全世界・全人類に対して「完全に開かれるのである」（『カール・バルト教会教義学 和解論 I / 1』）。したがって、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である教会は、次のような教会を目指すべきなのである——「世界の救いを何かある国家的、政治的、経済的または道徳的な諸原理や理念や体制の内に求めようとしないで、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストを、いっさいのものにまさって恐れ、かつ、愛すること、〔キリストにあっての〕神を、大きな問題においても、小さな問題においても、彼がかつてあり、いまあり、やがてあり給う權威のままに肯定し、是認すること、私たちの個人的、社会的生活を敢えて律して、すべての善きものを神から、神からすべての善きものを期待するべきである」、「不毛な反抗や反論を避けて、西でも東でも等しく通用し、西でも東でもひとしく稀であり、人々に好まれぬ〔キリストの〕福音に、無償の恩寵によって、素直に止まるべきである」（『共産主義世界における福音の宣教 ハーメルとバルト』）。